

## 地域の資産を生かした絆づくり

### —地域の魅力再発見—

#### 高橋ゼミナール

3年	09M002	畔上早樹	09M004	五十嵐秀也
	09M027	斎藤美如	09M028	坂口智大
	09M048	土橋里美	09M049	鳥部健斗
	09M051	南雲顕滋	09M058	丸山諒
	09M061	山口祐貴		
4年	07M007	入沢直輝	08M003	石田美希
	08M004	板垣友祐	08M018	近藤翔
	08M051	梶谷貴広	08M065	渡邊尚史



# 目 次

- 1 はじめに
  1. 1 取り組みの趣旨
  1. 2 取り組みの目的
- 2 神谷地区の概要
- 3 神谷の魅力再発見の取り組み
  3. 1 神谷訪問・現地調査
    3. 1. 1 目的
    3. 1. 2 行事参加
    3. 1. 3 現地調査
  3. 2 ヒアリング調査
  3. 3 マップ作成
    3. 3. 1 マップ作成の概要
    3. 3. 2 文献調査—高橋九郎
    3. 3. 3 文献調査—白井又三郎
    3. 3. 4 チューリップ
    3. 3. 5 意見交換会
    3. 3. 6 マップのコンセプト
    3. 3. 7 発行部数と配布先
  3. 4 アンケート調査
- 4 歴史的建造物を活用した活性化
  4. 1 直売所
    4. 1. 1 商品の具体化
    4. 1. 2 目玉商品の検討
  4. 2 あぐりの里へのヒアリング調査
  4. 3 活性化案に対するアンケート調査
  4. 4 アンケート結果のまとめ
- 5 まとめ
  5. 1 マップ作りに関して
    5. 1. 1 まとめ
    5. 1. 2 反省点と改善点
    5. 1. 3 社会人基礎力の変化
  5. 2 連記的建造物を活用した活性化のまとめ

参考文献

謝辞

## 1 はじめに

### 1. 1 取り組みの趣旨

近年、少子高齢化や核家族化、若者の田舎離れなどの影響で、農山村地域が、活気を失いつつある。そのような中、自分たちの地域の歴史や文化を守り、伝統を後世に伝えてゆくために、自分たちの力で地域活性化に取り組む地域が生まれてきている。

高橋ゼミナールでは、住民による地域活性化策の企画・立案・実行を「地域活性化プロジェクト」の活動の中で取り上げ、平成21年度より取り組んでいる。具体的には、県や市などの地方自治体や国がなんとかしてくれるのを待つのではなく、自分達の地域は自分達で守って行くのだという思いを一つにして地域の活性化に取り組んでいる長岡市神谷（旧越路町神谷）地域をモデルにして、地域に残された文化、歴史、建築物などの資産を守りながら、地域の活性化をはかる方策について考えてきた。

21年度は、安全・安心・文化的なまちづくりーICTを活用した長岡を考えるーというテーマで、地域コミュニティ活性化要因を明らかにする取り組みを行った。22年度は、「ー地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考えるー」をテーマとし、地域に残された文化、歴史、建築物などの資産を守りながら地域の活性化をはかる“方策”と“住民意識”を明らかにした。

22年度の活動から、地域に残された文化、歴史、建築物などの資産を守りながら地域の活性化をはかるには、「そこに住む住民が地域に残る資産を知り、それを地域の共有財産として認識する必要がある」ことが分かった。そこで今年度は、昨年度の取り組みをより深める活動を引き続き行うとともに、新たな取り組みとして、「地域の資産を生かした絆づくりー地域の魅力再発見ー」というテーマで、自分たちが住む地域に残る資産や魅力を見つめなおし、それを地域の共有財産とする中で地域の絆を深める方策について考えることとした。

### 1. 2 取り組みの目的

高橋ゼミナールでは、平成21年度より「地域コミュニティを中心とした地域活性化」をテーマに、長岡市神谷（旧越路町神谷）地区の活性化策について考えてきた。昨年度は、歴史的な価値の高い「旧神谷信用組合」を活用した地域活性化策について検討し、今年度も継続して行っている（4年生）。

この取り組みを進める中で、神谷地区には、「旧神谷信用組合」の建物だけでなく、数えきれないほど多くの魅力がもっとあることが分かった。また神谷地区では、地域住民が楽しく参加できる多くの行事があることも分かった。

しかし、神谷地区の資産とも言えるこれらの文化、歴史、建造物や風土が、地域住民の間では必ずしも貴重な共有財産であるとは認識されていない、あるいは、若者や新興住宅地の住民には伝えられていないということが分かった。

そこで、今年度は、神谷地域が持つ「文化、歴史、建造物や風土」等を若者や新興住宅地の住民には伝えることにより、「神谷の魅力を再発見」してもらおうとともに「住民間の絆づくり」を深めてもらう、さらには他地域の人にも神谷地域を知ってもらうための方策を検討することとした。

## 2 神谷地区の概要

神谷地区は、信濃川と渋海川に挟まれた長岡市南部（旧越路町の東部）の平野部に位置し、周りを田んぼに取り囲まれた現代日本の平均的な農村地域である。地区には、戦後の農地解放が行われるまでこの付近一帯の地を所有した大地主高橋家が在住し、昭和30年3月に来迎寺・岩塚村・塚山村・石津村が合併して越路町が誕生するまでの間、旧来迎寺村の村役場が所在した地でもある。また、明治37年に設立された神谷信用組合、大正5年設立の神谷銀行（後に北越銀行の前身である六九銀行へ合併）の来迎寺支店）が所在したところでもある。また、1850年に高橋家の長男として生まれた高橋九郎（明治44年に帝国議会の衆議院議員）が中心となって、地区の産業活性化に古くから取り組んできており、新潟県の県花であるチューリップが県内で初めて栽培された地でもある。現在も米作を中心とする農業地域ではあるが、サラリーマンを主体とした兼業農家が大半を占めている。

現在の戸数は約160戸、人口は約630人である。その約25%は、ここ20数年の間に2度にわたって行われた宅地造成によって他の地区から移り住んできた人たちで構成されている。そのため、都市化が進む大・中都市周辺の農村地域同様に、古くからの住民と新興住宅地の住民との間の協調を課題として抱えている地域でもある。

図表2-1 神谷地区の地図



### 3 神谷の魅力再発見の取り組み

#### 3. 1 神谷訪問・現地調査

##### 3. 1. 1 目的

神谷地域の「魅力の再発見」と「住民間の絆づくり」をテーマとした今年度の取り組みに対する具体的な活動として、神谷地域の人物、建造物、行事などを紹介する「神谷情報マップ」作りを行うこととした。

そこで、神谷地区への訪問では、次の点を目的とすることとした。

第一、実際に神谷地区を訪れてその土地を直に見ることで、神谷地区の地理を把握するだけでなく、単に地図を見ただけでは伝わらないその土地の魅力を発見する。そして、その発見を、作成する地図の中に生かす。

第二、神谷地区の住民の方々との交流を図る中で神谷の人々の人間的な魅力を発見し、そこで発見したことを、「神谷の絆づくり」を考える際に役立てる。

第三、神谷地区を訪問することで、ヒアリング等を通じて交流を持った人たちだけでなく、神谷のより多くの方々に私たちの活動を認知してもらうとともに、私たちの顔と名前を多くの人から覚えてもらう。さらに、訪問をとおして多くの人達とコミュニケーションを交え、それ中からも神谷の歴史や魅力、文化などを見つける。

以上三点の目的の中でも、第3の目的を特に最も重視した。

##### 3. 1. 2 行事参加

「神谷情報マップ」を制作するにあたり、神谷地区についてより詳しく知る必要があった。そのため、神谷地区で開催される各種の行事に参加し、交流を深める中で「神谷の魅力とは何か」を考えるために、神谷地区で開催される各種の行事に参加した。

行事への参加の目的は既に述べたが、神谷地区の行事に幾度となく顔を出すことにより、神谷の方々との交流をただ単にゼミナール活動の一環とするのではなく、ゼミナールの関係を超えて個人的な親睦と友好関係を築くことを優先した。

また、そのような関係で会話することにより、私たちは自身のコミュニケーション能力等の社会人基礎力の向上を図ることができるが、それ以上に、神谷地区の人達との何気ない会話から、外から見ただけでは解らない内在的な神谷の魅力を見出すことができる。また、神谷地区の方々の身近にありながら、あまり気づいていない魅力などを発見することをできると考える。

参加した行事は、次のとおりである。

<実施>

- ・4月 花見
- ・6月 運動会
- ・7月 バーベキュー
- ・8月20日・21日 秋季大祭
- ・10月30日 収穫祭

H24年

- ・1月8日 さいの神

#### ・ 4月 花見

花見は私たちが初めて参加した行事である。神谷の方々は私達を暖かく迎えて下さり、神谷地区の特性や人柄として「温かみのある人柄」を感じた。そこから、私達は神谷の魅力としてその「人柄」を見出した。その後の活動では、魅力の一つとして人柄をとりあげ、中間発表の際にも神谷地区の人柄を魅力の一つとして紹介した。ここで人柄という神谷地区の魅力を発見したことは、高橋ゼミの活動や指針に大きな影響を与えたと言える。

#### ・ 6月 運動会

神谷地区の6月の主な行事である。この行事参加では、以前の花見と違い、神谷地区の小学生達やご婦人方の参加が多く見受けられ、様々な年代の男女が集まっているなど感じた。神谷地区の方は、「運動会は飲むことがメインではないから、子供や女性が参加しやすい」というようなことをおっしゃっていた。

この行事参加では、神谷の若い世代の方々からもお話しを聞くことが出来たが、年配の方からは、「新しく来た人の顔がわからない」というものがあった。また小学生たちは「中学生になったら運動会に参加するかわからない」と言い、その保護者の方々も「子供が参加したから自分も参加した」というようなことを言っておられた。神谷の年輩の方々と比較的若い新興住宅に住む方々との間に壁があるように感じられた。

#### ・ 7月 バーベキュー（草刈り）

高橋ゼミナールと神谷地区の方々との交流を深める目的で、私たちが親睦会を提案し、神谷地区の草刈後の飲み会を企画した。この企画では、できる限りゼミナール生全員が参加できるよう予定を調節し、ゼミナール内での親睦を深めることも視野に入れて計画した。

神谷の方々とお酒を飲み交わしながら、多くの人と交流を持つことができたため、様々な年齢層の方々から貴重なお話を聞いた。その会話の中には高橋九郎氏などの話題も出ており、高橋九郎氏が神谷で実際にどのように思われているかについて知ることができ、その後に行った高橋九郎氏に関する調査の際の参考になった。

またこのときの飲み会で、神谷の方々がこのような飲み会の場でのコミュニケーション（いわゆる飲コミュニケーション）をことのほか大切にしていることを実感した。

#### ・ 8月20・21日 秋季大祭

この秋季大祭は、2日間にわたって行われる神谷の伝統的な行事である。この行事では、神谷の芸能文化にふれることができた。この行事の進行を大きく分けると、1日目は昼に踊りと笛の演奏を伴う屋台引き、夜は飴屋や広大寺などの伝統芸能を中心にした演劇大会が行われる。そして翌日は、午前中は班対抗カラオケ大会が行われ、午後からは昨日の屋台がまだ廻っていない地区を巡り、神社に奉納するまで続けられる。



この行事では、神谷の伝統芸能を見ることができると言われ、今後の参考にと思い参加した。

この行事でなにより驚いたのは、子供も含めた行事への参加者の多さである。この祭りは夜 10 時半まで行われたのだが、そんな時間でも小学生もまだ参加しており、10 時近いにも関わらず伝統芸能の笛の演奏を行っていた。こうした行事への参加率の高さは他の地域ではそうそう見られるものではない。行事の魅力だけでなく、地元民の団結力や皆で共に神谷を盛りあげたいという気概が現れているのだと感じられた。



この行事に参加している際に、以前からお話しを伺っていたチューリップの栽培者である水島義郎氏の息子にあたる水島敏さんにお会いし、その後のヒアリングにつなげることができた。

#### ・10月30日 収穫祭

収穫祭は、中越地震以後に稲作体験を通して子供たちに神谷の主要産業である農業を伝え残そうということで中越地震以後に始めた「どろんこ田」の活動の一環として行われるもので、収穫を祝うとともに住民間の交流と慰労を兼ねた行事である。しかし、この行事が中越第大震災の頃に行われることと、多くの住民が参加することから、防災訓練もプログラムの中に取り入れられており、最初に避難訓練や応急救護措置方法の実演が行われる。その後、伝統芸能や餅つきといったイベントが行われる。会場では、雑煮が無料で配られると同時に精米の販売なども行われ、地元の生産物などに対するし地域住民間での共有意識が垣間見えたように思う。

この収穫祭へは、4月の花見に参加した時からお誘いを受けており、必ず参加すると決めていた。

#### ・1月8日 さいの神

さいの神は、神谷地区での新年を迎えての最初の行事である。さいの神自体は多くの地域で行われているポピュラーな行事であるため、神谷地区のさいの神が他の地域のさいの神とどのような差異があるのかなどを確認することも視野に入れ、行事に参加した。また、神谷地区の数少ない冬の行事を実際に体験するとともに、写真などの資料をできる限り収集することも目的とした。



この行事では、運動会のように女性や小学生の参加がいつもよりも多く、常に参加者が多い神谷地区の他の行事以上に大勢の参加者がいるように感じた。神谷地区の方がいうには、神谷地区の住民だけでなく、その親戚等が多く来ているということだった。またさいの神の場では、甘酒の配布やくじ引きを行うのだが、その際は神谷地区以外の人へも平等に行って



おり、そこに神谷地区の人達の人柄の暖かさや懐の深さを改めて実感した。

### 3. 1. 3 現地調査

「神谷情報マップ」を制作するにあたり、実際に神谷地区の土地を見て、地理や建物、班分けなどを調べて神谷地区についてより詳しく知る必要があると考え、夏休みを中心に現地調査を行った。

調査に際しては、出会った方々からお話を聞くことを通して交流を図ることや、神谷地区の魅力や歴史、偉人達が地元に対する意識をどのように抱いていたのか等の情報も集めるように心がけた。

この現地調査を通して、ゼミ生全員が神谷を理解し、興味を持つことができた。

現地調査は、各回3～4人で合計5回、実施した。

#### 第1回

日時：8月4日

目的：神谷地区周辺の名所巡り

神谷地区の境界線の確認

内容：旧来迎寺村の大地主であった高橋家ゆかりの地である紅葉園や自然公園等を訪問した。また地区と地区の境目を車で移動して確認した。結果、住宅街から離れた場所にも家があり、そのうちの一軒は萱葺屋根の家であることを発見した。さらに具体的な情報を収集するために神谷公民館においてヒアリングを行った。区長さんをはじめ3人の方から、神谷地区の範囲についてお話を伺うことができた。

#### 第2回

日時：8月9日

目的：神谷地区内の調査

内容：前回に続いて、地区と地区との境界の調査を行うこととし、神谷地区内を歩いて地区と地区との区切りとなる道や目印を見つけた。この調査の中で、「神谷遊園地」や「ゲートボール場」、「観音様」等を見つけた。調査では、神谷の地図では途切れていた場所にある民家が神谷地区なのか、浦地区なのか断定できない場所もあった。

#### 第3回

日時：8月17日

目的：地図に載っていない民家の調査

越路郷土資料館訪問

内容：前回の調査で判明できなかった民家についての情報を得るために高橋教授の自宅へ訪問した。その結果、その民家を含む地図に載っていない4軒は神谷地区に属していることが確認できた。しかし実際にその場所を訪れてみると複雑であり、神谷地区か浦地区なのか分からなかった。そのため、神谷公民館に行き改めて区長さんに詳しい話を伺った。

越路郷土資料館訪問した。神谷の方達が作ったと思われる文化財のようなものや、神谷周辺地域に関する資料等が展示されていた。

#### 第4回

日時：8月25日

目的：神谷の地図の空白部分調査

内容：これまでに調査した場所を再度訪れ、調査した。そのとき、調査に使っていた地図に空白部分があることに気付いた。その空白部分を実際に歩いて調査した。その結果、その部分は新興住宅地が多く、新しく移り住んだ方の家や新築した家であることが分かった。

#### 第5回

日時：8月27日

目的：地図の空白部分の調査（続き）

区長さんへのヒアリング

内容：前回中断した地図の空白部分を埋める作業を今回で終えた。歩いて回っても分からなかった地図の空白部分について、神谷公民館で区長さんに伺った。その結果、調査に使われていた地図は数年前のもので、現在と異なっていることが判明した。

図表3-1 もみじ園



図表3-2 井上円了顕徳碑



図表3-3 現地調査の様子



図表3-4 川遊びに使われる筏



図表 3 - 5 新興住宅地



図表 3 - 6 神谷遊園地



### 3. 2 ヒアリング調査

マップの情報面を作成するのに必要な情報を収集することと、私たちの活動へのアドバイスを受ける、さらには、私たちと神谷地区の方々との間に活動に対する見解や認識での相違がないかを確認し、神谷地区の方々の意見を活動に反映することを目的としたヒアリング調査を2回にわたり実施した。

<実施>

- 9月25日 区長さんと新興住宅住民へのヒアリング調査
- 10月25日 水島敏氏へのチューリップに関するヒアリング調査
- 12月22日 製作中の地図への意見交換会

#### 区長さんと新興住宅の方へのヒアリング

9月25日に神谷公民館で区長さんと新興住宅の住民の方2名を対象に実施し、神谷の魅力を中心に伺った。

##### 新興住宅の方へ質問

①なぜ神谷に住もうと考えたのか。

→神谷の土地の条件が良かったことと、中越地震がきっかけで引っ越すことになった。

②神谷に引っ越して、どのような印象を持ったか。

→店も学校もあり不便がなく、地域の行事もたくさんあり、良いところがたくさんある。

③行事に参加してみても感想等がありますか。

→行事に参加すると楽しいし、神谷が自分たちを迎え入れてくれたのだから馴染んでいかなければいけないと思う。また、先輩後輩の関係が無く「みんな仲間だ」というフレンドリーな地域性が神谷にはある。

##### 区長さんへ質問

①神谷の今と昔で変わったことはありますか。

→今と昔を比較すると、風景はほとんどが変わった。しかし、移り住んだ家はあまりなく、現在神谷で一番古い家は昭和20年ごろ建てられた。

②神谷の地形で良いところは。

→神谷には比較的大きな川があるため、雨の被害に遭いにくい。

③神谷と他の地域の違い、優れている点は何か。

→「みんな仲間なのだから楽しもう」という意識が強い。他の地域で同じような行事をやろうとしても集まらないという。その理由の一つとして、神谷は160～180世帯であり、まとまりやすい世帯数である。これ以上世帯数が増えるといろいろな意見が出てうまくいかなくなる。

④9月21日に行われた行事について聞かせてください。

→「どろんこ田の稲刈り」といって、子供達やその保護者が春に田植えをした田んぼの稲刈りや脱穀をする。子供主体の行事であり農業が主体のこの土地（神谷）に慣れてもらうことを目的に始めた。

このヒアリングでは、神谷地区では移り住んだ家が少ないという事から、神谷地区には地元愛の強い方が多いことがわかった。さらに、行事への出席率が高い事から何事にもまとまりがよく、伝統文化や伝統行事を継承していこうとする地元への熱い想いが分かった。

私たちは神谷地区を訪問し、「神谷地区の魅力」とは何かを知ることが、活動をすすめる上で非常に大切なことであったが、このヒアリングを通して、魅力の一つとして「人柄」が挙げことができると考えた。各種行事や私たちが主催した7月のバーベキューに参加した時にも感じたことだが、元気が良く明るい方が多いというのが印象で、初対面でも気軽に話をする事ができる気さくな人柄と、行きやすく、入りやすく、馴染みやすい地域柄であることが神谷の魅力であると考えた。

図表3-7 ヒアリングの様子（9月）



図表3-8 バーベキュー（7月）



10月25日に実施した「水島敏氏へのチューリップに関するヒアリング調査」については、「3.3.4 チューリップ」の中で紹介する。

12月22日に実施した「製作中の地図への意見交換会」については、「3.3.5 意見交換会」の中で紹介する。

### 3. 3 マップ作成

#### 3. 3. 1 マップ作成の概要

「地元の魅力を再発見・再確認」と「地元知識の情報共有によるコミュニケーションの円滑化」を目的として、マップ作りを行った。

マップに様々な情報を載せることで、今まで知らなかったことや自分達の地域についてより深く知ってもらい、このマップを通じて住民同士や世代を超えた交流の輪が広がり、コミュニケーションの円滑化が図れると考えた。またこのことが地域活性化に繋がるのではないかと考えた。

「神谷情報マップ」と名付けた今回の地図は、神谷の発展に大きな役割を果たした高橋九郎氏、今も建物が現存する旧神谷信用組合、神谷において新潟県初のチューリップ栽培を行った水島義郎氏、毎日11時にサイレンで時を告げるようになった由来などの情報を載せるとともに、若者や新興住宅地の住民にはよく分からない神谷地区内の班分けや歴史建造物等の位置を地図上に示すことにより、神谷を一目で理解できるようにした。

地図を通してこれらの地域資源を再認識し、再び地域で活用することで地域の魅力が増し、外部からの方々が神谷を訪れるきっかけとなって、神谷地域への人の行き来が活発になるは、地域の活性化に繋がると考える。

#### 3. 3. 2 文献調査—高橋九郎

##### 略歴

1850年（嘉永3年）に高橋家9代目当初の長子として生まれる。幼名は繁太郎、後に右八郎、父亡き後は10代目の家督を相続し、父名の九郎を継いだ。

1864年（元治元年）から1869年（明治2年）まで小千谷市片貝町私塾「耕読堂」で丸山貝陵より漢学を学んだ。1870年（明治3年）から1873年（明治7年）までは、浦の私塾「慈光齋」で旧長岡藩校崇徳館都講・木村鈍叟より漢学を学ぶと同時に優れた数理能力を発揮した。そこで石黒忠恵や井上円了などと出会い、自らの飛躍のための人的基盤を得た。

1894年（明治27年）3月に行われた帝国議会の第三回衆議院選挙にて当選。当時の来迎寺村における初の帝国議會議員を勤めることとなる。旧越路町域出身の国會議員は、後に大地主互選の貴族院議員に当選した塚山出身の長谷川越夫氏の2人だけである。後に東京に出て活躍する長谷川氏に対して、九郎氏は議員時代でもその関心を地元地域へ向けていた。

その後、神谷信用組合の創設など、経営者としての才覚も発揮する。幼時に学んだ「修身・齐家・治国・平天下」を一生の信念として、時鐘及び私設气象台の設置、共同苗代の導入、土地改良の推進など、その生涯を地元地域の発展に捧げた。



初代  
高橋九郎  
(明治37年～大正9年)

## 神谷の大地主

篤農家、企業家、政治家として幅広く活躍したが、そのうちの1つが地主としての活動である。来迎寺村一帯の地主として、小作人への協調的対応を重要視していた。

1911年（明治44年）に農村視察の一環として高橋家を訪問したイギリスの社会学者でロンドン大学の教授であるシドニーとビアトリスのウェッブ夫妻に対して、新潟県の地主小作関係について、「一、地主小作の関係には、地主と小作が直接接することなく、仲小作という支配人を置く「都市的又ハ華族的組織」と、地主と小作が直接に取り交わす「農村的組織」の二種類があり、「普通ノ取扱イ方」である后者が新潟県の大部分である。一、地主と小作は親子のようなもので、互いに親分・子分と呼び合い、小作契約書などもなく、小作が高橋の家に来れば必ず飲食をして帰る習わしが続いている。（中略）一、本年二月、高橋家の小作人三九五人のなかで、百年以上にわたって一つの欠点もなく忠実に小作を務め、家庭も円満で、社会的にも忠実なものを選抜したら十六人が該当した。この者たちに、「一百年忠実記念」として銀杯を贈り表彰した。」と述べた。ここからも推測できるように、九郎氏は、小作人に対して協調を持って接する“家族的親愛”を大事にしていた。また、小作人表彰について、新潟新聞ではこれを新潟県下最初の試みとして報道している。

## 地域の名望家としての活動

九郎氏は、1878年（明治11年）に十六大区小六区受け持ちの副大区長に就任した。その後1881年（明治14年）には、宮川外新田・道半両村の戸長に選出（公選）された。1884年（明治17年）からは、宮川外新田はじめ10か村連合の戸長に推された。若くして既に地域住民から敬慕を集めていたことがわかる。また同時期に、自宅の倉庫屋上に時鐘を設置した。当時、農家に時計はなく、時間を知るすべがなかったことから、鐘を鳴らすことによって田に働く人々に時間を知らせていた。鐘は、昼の準備を知らせるために午前11時に1回、亭主の帰宅を促すために午前零時に1回鳴らしていた。これは釣鐘が廃止されるまでの53年間継続され続けた。この風習は午前11時にサイレンを鳴らすという形で現在も神谷に引き継がれ、地元住民にとっては馴染み深いものとなっている。

九郎氏が地域住民より信頼と敬慕を得て、なおかつ地域自治に参画していく契機となったとされているのが、家督相続後間もなく参画した地租改正事業に尽力したことにあるとされている。これは各地域ともに長い年月と費用を要した大事業であり、当時20歳代であった九郎氏はその優れた測量技術と熱心な公共精神が認められ、これに関わる測量業務の遂行者に選ばれた。

また九郎氏の独創的な発想の1つに、1906年（明治39年）に設置した私設气象台がある。これは農業にとって気象情報が必要であると考えてのものであり、九郎氏は自記晴雨計及び自記温度計を購入し、自宅前に百葉箱を設けた。また新潟測候所へ毎日連絡をして得た天気予報を、六三尺（およそ20メートル）の竿頭に信号旗として掲げ、地域住民にその日の天気を知らせた。農業はもちろんのこと、付近の小学校はこの予報を頼りに屋外諸行事を行ったとされている。

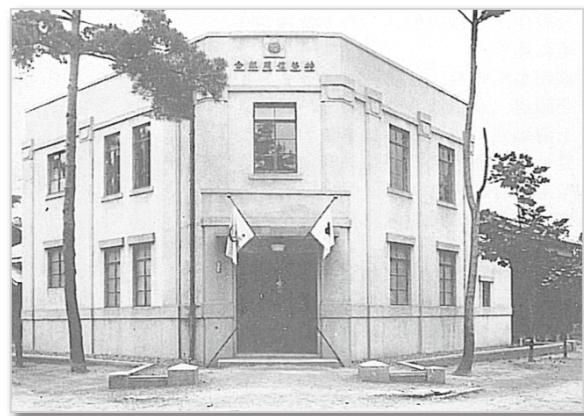
1908年（明治41年）には、宮川外新田・道半地区の土地改良を推進する。信濃川と渋海川に挟まれた農村集落において最大の課題は洪水対策であり、かつてよりこの地域は湿度が高くなりやすい地域であった。そこで、農民の協力を得ながら水路の付け替えな

どを行い、耕地整理を施工した。また、県外から技術者を招き、暗渠排水を施工し、成功させた。これにより農民の苦勞の軽減、収量の増大に結びつき、大変喜ばれた。

その他にも共同苗代の導入、果樹園芸等副業の奨励、県下へのチューリップの移入など、数々の活動を行い、地域の発展に貢献した。

### 神谷信用組合の創設

1896年（明治29年）に来迎寺村を経由する北越鉄道（現・信越線）の工事が開始された。これにより土木工事の労働需要が急増した。その賃金収入が農家を潤したが、住民に貯蓄思想が根付いておらず、また金融機関も存在しなかったことから、奢侈の弊風をもたらした。九郎氏はこれを良しとせず、その対策として、庶民銀行的な金融機関の設立を計画した。しかし、当局の許可が得られず、実現することは叶わなかった。



同時期に九郎氏と親交があった品川弥次郎氏及び平田東助氏が産業組合の必要性を論じた。1900年（明治33年）3月に産業組合法が公布され、9月から施行された。これにより農村協同組合として、信用組合、販売組合、購買組合、生産（利用）組合が組織できるようになった。九郎氏は、県当局者との面談や県農会新潟成資信用組合を訪問するなどして信用組合設立の為の調査や研究を行った。これにより農民の奢侈放免の風習を正し、信用道徳を尊重するため、そして協同一致の考えの啓発及び勤勉と貯蓄の良風を涵養にするためには信用組合でなくては目的が達成できないと考え、1904年（明治37年）に新潟信用組合に次いで県下2番目の信用組合となる、有限責任神谷信用組合を設立した。名前の由来は、この地域が越後国紙屋之荘と称されていたことにちなんだとされている。設立当初の役員には、理事長高橋九郎氏、理事山本仁七郎氏、水島惟孟氏、高橋逸平氏、高橋三郎氏、監事平沢浅太郎氏、山崎慶次郎氏、笹井繁太郎氏の8人が就任した。事務所は宮川外新田の高橋逸平氏宅に設けた。

神谷信用組合の業務開始について、同年4月19日に刊行された新潟新聞は以下のように取り上げた。「神谷信用組合業務開始 三島郡来迎寺村大字宮川豪農高橋九郎氏は、居村の農民に、低利長期の農業資本の融通を与へ、併せて勤儉貯蓄の便利を与ふるため、先般来信用組合組織の必要を感じ、屢々本県当局者、県農会新潟成資信用組合等に就いて研究調査の結果、同組合を組織し、既に第一回の払込も終り、本月十七、十八の両日にて貯金を開始し、十九日より貸付を開始する計画なるが、設立登記当時の組合百四十名に達し、目下尚六十名の加入申込者あるよし、出資一口の金額は十円なるが故に、全部払込済の暁には、出資額にても二千円以上に達し、貯金を加ふれば五千円以上の農業資本を融通し得るべく、而して貯金開始の当日は一口の金額最多四十円、最小二銭にして、最初の一日は約千円に達し、両日にて二千円以上に達する好景なりしと、同組合は一円以上の出資払込者に十円以上の貸付を行ふよしなれば、組合員の便利多大にして、県下の模範組合たるべしと言ふ」。

しかし、順風満帆な経営を行うには時間を要した。設立当初は、産業組合法施行から日も浅く、農民に信用組合の性質が理解されていなかった。信用組合は「資産家階級のための営利会社」と誤解され、組合員の加入勧誘に困難を来した。その後、役員一同は献身的態度で信用組合の趣旨の普及に努めた。そのうえ、役職者は無報酬で経営にあたり、組合の資金が欠乏した際には、理事長である九郎氏自らが私財を預金し、金融を円滑にし、組合員の利便を図るなど尽力し続けた。その結果、業績は右肩上がりとなり、同地区の共同金庫と呼ばれるまでに発展した。1906年（明治39年）には組合事務所を宮川外新田九九番地に新設、移転。設立3年目からは、県内外から視察者が相次ぐようになった。

1909年（明治42年）には、大日本産業組合中央会会頭平田東助から表彰状を授与された。翌年には組合創立以来事業を発展させ、産業の改善及び自治の振興に役立った成績優良の組合として、全国の模範組合と称されるようになった。これは、設立から7年目の出来事であり、神谷信用組合が早くから県内外で注目されていたことがわかる。

やがて神谷信用組合の資金需要が増大したため、1916年（大正5年）に高橋家による全額出資のもと神谷銀行を設立した。社長高橋九郎氏、取締役高橋友二郎氏、高橋逸平氏、監査役高橋亮三氏、高橋国四郎氏、相談役西脇濟三郎氏が就任した。神谷信用組合からの預金を中心としており、1917年（大正6年）下期には、総預金のうち62.9%を神谷信用組合が占めていた。当時は、第1次世界大戦の影響により、農村、商工業が好況であったため、その方面からの預金も多くあり、資金量は大変豊かであった。また、資本金は全額高橋家が出資していたため、あえて配当をする必要がなく、設立後長らくは無配当であった。1927年（昭和2年）の金融恐慌により、多くの銀行や会社が破産・休業をしている中で神谷銀行の経営も低迷した。これを契機に政府は銀行法を公布した。これにより人口10万人未満の町村にある銀行で資本金が50万円に達しないものは無資格銀行とされ、5年以内の解散、もしくは合併が義務付けられた。神谷銀行は、無資格銀行には当てはまらなかったが、極度の経営悪化と同行の将来を展望し、六十九銀行と合併した。これは、現在の北越銀行来迎寺支店である。

### 3. 3. 3 文献調査—白井又三郎

白井又三郎氏は、1896年（明治31年）神谷に生まれ、生涯を地方自治の発展に尽力した近代政治家である。来迎寺村、石津村、岩塚村、塚山村の合併に尽力し、旧越路町の初代町長を務めた。また、高橋九郎氏とも親交があったされる。ここでは、白井又三郎氏の活動と、どのように越路町を築き上げて行ったかを概観する。

#### 略歴

- ・昭和22年 4月 来迎寺村村長
- ・昭和26年 9月 三島群南部郷土地改良区理事長
- ・昭和30年 4月 越路町町長に就任
- ・昭和37年 2月 長岡郷耕地協業会長
- ・昭和38年 4月 信濃川左岸地改良区連合会理事長
- ・昭和41年 8月 三島群村会長
- ・昭和46年 4月 新潟県議会議員



- ・昭和47年 3月 信濃川左岸土地改良区理事長
- ・昭和45年11月 勲五等双光旭日章

### 生い立ち

浦尋常高等小学校を卒業後、舞鶴海兵団へ入団。昭和2年に来迎寺役場書記となった。昭和13年に県職員となり、職業紹介業務に従事した。昭和22年に小千谷勤労署長（現在の職業安定所と労働基準監督署を兼ねた役所）から来迎寺村村長に転じ、8年間村長を務めた。越路町発足以来、越路町町長を4期16年に渡って務め、町の基礎作りから発展まで成し遂げた。その後、新潟県会議員となるが、1期目の途中で他界した。

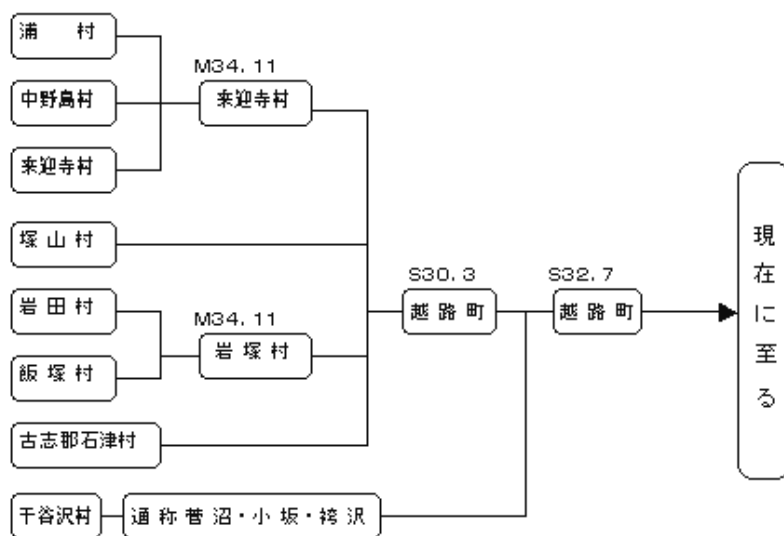
### 越路町誕生の功労者

1953年（昭和28年）に町村合併促進法が施行され、それを受けて新潟県が示した合併案は三島群南部郷と言われる片貝町、来迎寺村、岩塚村、塚山村、深才村の一町四か村を合併させる計画がたてられた。それに対し、三島群町村合併促進委員会の合併案は、片貝町、来迎寺村、岩塚村、塚山村、古志群石津村を統合するというものであった。

この合併案に対して、まず片貝町と来迎寺村との主導権争いをめぐる争いから始まり、他の町や村も主張や意見の食い違いなどで、合併問題は混沌とした状態になった。このような中、白井又三郎氏は来迎寺村村長として、「これから他の四か町村と良く話し合いをすれば、落ち着くところに落ち着くもの」と考え、難航する合併問題の解決に向けて尽力した。

昭和29年12月22日に南部合併促進協議会が設立され、白井又三郎氏が会長に就任した。白井又三郎氏のもとで合併促進・新町誕生に向けて活発な話し合いが行われ、昭和30年に「越路町」が誕生した。当たりのよい外柔内剛の人と称され、合併後も新庁建設や河川改修などの治水対策、工場誘致や学校の統廃校などの多事多様な政局運営に手腕を発揮し、町民からは「越路町の生みの親」と敬慕されている。

図表3-9 越路町が形成された歴史図



(<http://www.city.nagaoka.niigata.jp/shisei/gappei/gappei6enkaku/kosiji.html>)

## 名誉市民へ

白井又三郎氏は、すでに述べたように昭和22年に旧来迎寺村長に就任以来、日夜地方自治の発展に尽力し、特に越路町発展の基となった町村合併に力を注ぎ、初代町長に当選以来16年間にわたる民主町政は町民に高く評価されてきた。昭和46年3月に町長を辞任した後も、県議会議員に当選するなど、地域社会の発展に尽くされた。この功績を讃え、越路町より、合併20周年記念式において「名誉町民（長岡市と合併後は名誉市民）」の称号第一号が送られた。また、昭和55年には越路町総合福祉センター前に「白井又三郎翁像」が建立された。

### 3. 3. 4 チューリップ

神谷地区を調査していた際、神谷地区は新潟県のチューリップ発祥の地であるということを知った。しかし、この事実は地区の住民にもあまり知られていない。これが本当であれば、神谷地区の知名度向上につながり、また地域の活性化に役立つと考え、詳しく調べることにした。

#### 新潟県におけるチューリップ

チューリップは新潟県の県花であり、新潟県はチューリップの切り花生産量日本一、球根生産量二位である。

また、県だけではなく、新潟市や胎内市で市花に制定されるなど広く県民に愛され、県内各地で栽培されている。

#### 神谷におけるチューリップ

明治37年ごろ、当時の三島郡来迎寺村（現長岡市越路地域）の水島義郎氏が、同地域の大地主であり衆議院議員であった高橋九郎氏からチューリップの球根を入手し、自宅の庭で栽培し、見事新潟県で最初のチューリップが神谷の地に開花した。

しかし、あくまで義郎氏が個人的な趣味として栽培を行うにとどまったため、神谷がチューリップの産地となることはなく、残念ながら当時の球根や栽培した畑も残っていない。



水島義郎  
(昭和23年～昭和24年)

#### 資料調査

新潟県立図書館において、水島義郎氏とチューリップについて記されている資料を調査した。以下は発見した資料とその抜粋である。

I チューリップの葉 新潟県農産物検査所 刊行年不明

3 ページ 来歴

『本縣の花弁チューリップは其の期限相富古く今より三十年以前既に業者間今日謂ふ

食用チューリップ等の品種が僅かながらも培養せられし由なるも優良品種の培養は明治三十七年頃にして三島郡来迎寺村水島義郎氏は東京妙華園より取り寄せ試作さしに寒地積雪多きにもかかわらず成績良好なりしを見其の後和蘭クレシツジ種苗商會より新品種をヒヤシンスと共に取り寄せ試作せしに更に良結果を得たるが故に随近の學校其他へ寄附し、之れが観賞を助長し紹介されたり。』

## II チューリップ栽培誌ノート 木村敬助 1997

### 43ページ 1 球根生産としてわが国に立地する迄

『明治時代の国内消費のためのチューリップ球根は、そのほとんどが国外に依存していた。しかし、このようななかにあつて、国内において球根の繁殖—球根の商品的生産が試みられなかつた訳ではない。新潟県三島郡来迎寺（現、越路町）の水島義郎氏はその例である。』

### 119ページ チューリップ物語（3）

『三島郡来迎寺（越路町）の水島義郎氏も、当時球根栽培を試みた一人であるが、火山灰土壌であつたことや、栽培技術が低く、また球根販売市場が確立されていないことなどから失敗に終わっている。』

### 127ページ 3-1新潟県におけるチューリップ球根生産の歴史

『明治37年来迎寺村（現三島郡越路町）水島義郎氏が新潟県で始めて、チューリップを栽培した（水島氏は、花卉園芸家で、東京妙華園からチューリップを購入試作、その後オランダのクレチ種苗商會から多数の品種を輸入、栽培品種約140、観賞にとどまり、産地化に至らず、）大正3年小合村（現新津市）小田善平太氏が横浜植木会社からチューリップを購入し、観賞用として庭先に試作した。』

### 133ページ 新潟チューリップ物語

『明治三十七年（九〇四年）、三島郡来迎寺村（現・三島郡越路町）の水島義郎氏の庭に、新潟県で最初のチューリップが咲きました。水島氏はその後もオランダから球根を購入し、明治の終わりには百余りの品種が栽培されるようになりました。』

### 145ページ チューリップ栽培誌—略年表とノート

『1904（明治37年）新潟県三島郡来迎寺村（現越路町）神谷の水島義郎が、チューリップを試作。その後東京妙華園、更にオランダのクレラージ種苗会社から球根を輸入し、明治末には100品種余を観賞用として栽培、学校等に球根を寄附した。』

### [ノート5]水島義郎のチューリップ栽培余話など

『(1) 水島義郎（1885~1959）のチューリップの栽培は、来迎寺村（現越路町）里正の大地主で衆議院議員の高橋九郎が、東京で片貝出身の石黒忠恵からもらった球根を、水島に栽培させたことから始まる。美しい花は咲いたが、花の名前は分からなかった。水島は、叔父で来迎寺村浦（慈光寺）出身の井上円了（東洋大学の創設者）に調べてもらって、チ

ューリップと知った。井上によれば、大日本園芸会長大隈重信の庭（東京都豊島郡下戸塚村字稲荷前、現早稲田大学大隈庭園）にもチューリップは咲いていたが、水島のチューリップより貧弱であったという（松岡スミ、水島敏、水島明氏らからの聞き取りを要約）。

(2) 新潟県で最初にチューリップが咲いた水島義郎の畑は、現在水島敏氏の植込庭園になっている。水島家は、大將4年の水害で前庭に移築された。昔の家屋に続く前方の畑約5畝歩（地籍は大宇浦）にチューリップは作付されていたという。

(3) 新津市史等に「水島は小田喜平太にチューリップの知識を伝えた」とあるが、これは事実かどうか疑問で、両家の関係は再調査する必要がある。なぜなら、小田の手記やその後も両者の関係を示す資料が全くない。水島は長岡中学卒、前職は神谷信用組合書記で、市史に記述の郡農会技術員の資格があるのか。また長男や長女の話では、父は中蒲原郡役所の勤務で小田との交友関係は聞いていないなどが理由である。』

#### 162ページ 収録資料の訂正と検討項目

『水島義郎のチューリップ栽培の動機については、上記の関係者の聞き取りのほか、次の資料がある。すなわち、「中越新報（大正7年11月17日付け）の水島義郎氏の紹介記事」によれば、明治37年ころ鈴木充美代議士（三重県）が英国から数鉢のチューリップをもって帰朝し、翌年、その球根を大隈侯爵の温室で栽培したが生育甚だ不良であった。当時チューリップは珍花であるが、本邦では不適とされていた。水島氏はこの話を高橋九郎代議士から聞き、同氏を介して鈴木氏から3球ほど分けてもらい、栽培したところ立派に育成開花した。その翌年によく川瀬農学士がチューリップの栽培に成功したと「園芸の友」誌が報じている。中越新報は水島氏をわが国におけるチューリップ栽培の先駆者であること。そして、その後オランダや英国から多数の品種を購入し、200品種も栽培して、日本におけるチューリップ王、権威であると紹介している。』

### III チューリップ・鬱金香一歩みと育てた人たち— 木村敬助 2002

#### 60ページ 第2節 新潟県に初めて咲いたチューリップ

『新潟県はわが国におけるチューリップうの球根生産の発祥した県であるが、わが国で、初めて本格的にチューリップを咲かせたのも新潟県であった。その人は、新潟県三島郡来迎寺村（現越路町）神谷の水島義郎氏（1885～1959）である』

#### 185ページ 新潟県の産地を育てた人たち

##### 『水島義郎（1885～1959）

三島郡来迎寺村（現越路町）神谷に生まれる。明治30年代後半に、日本では開花ままならなかったチューリップを見事に咲かせ、明治末には百品種余を栽培してチューリップ王とも呼ばれた。』

### IV 小山重小伝 我が国チューリップ栽培の先覚者 木村敬助 2008

#### 18ページ

『新潟県では明治三十七年ころから三島郡来迎寺村神谷の水島義郎がチューリップの栽培を成功させているが、種球は、明治三十四年に東京府下荏原郡南品川字三ツ木に設立

された妙華園の直輸入球を使用していたと考えられる。』

このように義郎氏とチューリップについての記述は少なかった。

また、最初のチューリップ入手先は文献により①高橋九郎氏からもらった説、②東京の園芸店から購入した説、③オランダの大使から贈られた説の3説が混在していた。

## ヒアリング調査

新潟県で最初にチューリップを栽培した水島義郎氏の息子である水島敏氏に父義郎氏とチューリップに関するヒアリング調査を行った。ヒアリングの内容は、以下の通りである。

図表3-10 水島敏氏へのヒアリング（10月）



日 時：2011年(平成23年)  
10月25日

対象者：水島敏氏

内 容：水島義郎氏とチューリップについて

結 果：

- チューリップ栽培のきっかけ  
- 入手方法

文献：3つの説あり。

- ①京の園芸店より購入
- ②オランダより購入
- ③高橋九郎氏から入手

→③の高橋九郎氏から入手とのこと。

しかし九郎氏がチューリップの球根を入手したきっかけは不明。

その後東京の園芸店等からも入手。

- 当時の様子

- 水島義郎氏はとても花が好きな人だった。
- 家の前には近くの小学校が遠足に、軍人が花を見に、新聞社が取材に来るほど立派な花畑があった。
- 家族はきれいな花だとは思っていたけれども特に気にはとめていなかった。
- この当時大隈重信氏の庭にもチューリップが咲いていたが義郎氏の叔父である井上円了氏の話によると水島邸のチューリップの方が立派だったらしい。

- 神谷とチューリップ

- あくまでも水島義郎氏が個人の趣味として栽培していただけなので神谷のほかの家庭に広がることはなかった。

- あくまで個人の趣味としての栽培。そのため現在球根は残っていない。

#### ●新潟とチューリップ

- 神谷が新潟県におけるチューリップ発祥の地である確率はとても高い。

- 水島義郎氏は中蒲原の郡役所に勤めていたようだがそこからチューリップが中蒲原、新津地区に広がったのかどうかは不明。

ヒアリングでは当時の様子を詳しく伺うことができた。

文献調査で確認できなかった入手先も、高橋九郎氏から入手したのが最初であることを確認できた。その後、東京の園芸店から購入したこともあったらしい。

ヒアリング後、お庭を拝見させていただいたが維持・管理が大変だということもあり、残念ながら現在は花を栽培してはいないということだった。

### 3. 3. 5 意見交換会

#### 目的

「神谷情報マップ」の2つの案を持参し、平成23年12月22日に旧神谷信用組合の建物内において意見交換会を実施した。神谷地区に残る古文書や写真などの収集と保存活動を中心となって行なっている「歴史・保存の会」の方々と、二つの案に対する意見を頂いた。

この意見交換から、自分たちが作ろうとしている地図と、地元住民の方々が求めている地図とに差異が生じていることが判明したため、ここで出された意見を参考に地図に掲載する情報の訂正や修正、ゼミにおける目的の再検討を行った。

#### 意見と代案の提示

##### ①地図情報に対する意見

マップに追加したい地図情報について、特に多くの意見を頂いた。それら全てを今回作成するマップに反映することは難しく、頂いた意見の中から選別を行い記載することとした。

意見交換会を通じて得た意見のうち地図面に反映させたものは、「方位」の追加、「施設名・地名」の訂正、生活に関わるものとして「信号機及び消火栓・防火水槽の設置場所」の追加、「行事に関するイラスト」の追加、「川沿いの石垣についての情報」の追加などが挙げられる。

神谷地区の中を流れる須川にある間知石の石垣は、お城の石垣の石の組み方と同じ技法を用いて作られた非常に珍しいものである。神谷地区における貴重な歴史的財産の一つである。

また、神谷地区では、全世帯を16のグループに分け、班と呼んでいる。この班分けをマップ上では色の違いによって表すことにしたが、飛び地が存在することもあり、全体的に班分けの色をぼかし、境界線をはっきりさせないように変更した。

##### ②情報掲載面に対する意見

情報掲載面で反映した意見としては、フォントの変更、「白井又三郎に関する情報」の追

加、情報の訂正などが挙げられる。

変更前のフォントでは、小さい文字が潰れて読みにくいという意見が出たため、読みやすいフォントに変更した。また、神谷地区の紹介では、同地出身であり越路町の初代町長を務めた白井又三郎氏に関する情報は必要不可欠としての指摘を受け、追加を行った。その他、細かな修正を行うことにより全体のバランスが良くなることのできた。

### ③マップの活用方法についての意見

マップの配布方法として、インターネットに掲載をするべきではないかという意見を頂いた。現在はインターネットの時代であるから、現在配置を想定している場所だけではなく、神谷地区について知りたい人が、ネットを使って、“知りたいとき”に“どこにいても”手に入るようにするべきではないかというご意見を頂いた。また、他の地域から見て「自分たちも同じことをしたい」と思えるような、魅力溢れるマップを作るべきであるのご意見を頂いた。

マップに関する情報以外にも多くのご意見やお話を聞くことができた。今後のゼミナールの活動に関しての方向性を再検討する良い機会となり、本活動の課題や可能性を発見する契機となった。

## 3. 3. 6 マップのコンセプト

今回作成した「神谷情報マップ」のコンセプトは、「神谷の魅力の再発見」である。

神谷には様々な魅力が存在する。しかし、神谷地区の方々に話を伺うと、それらを「当たり前なこと」、もしくは「知らなかった」と言われ、地元の魅力としてきちんと認識されていないことがわかった。

そこで作成したマップでは、神谷の魅力を多くの方に知って頂く、あるいは再認識出来、かつ実際に使用してもらえるデザインを目指した。また、別面の掲載情報と内容が重ならないようにする、もしくは補助できるデザインにした。

以下に、実際に工夫した点のポイントを説明する。

#### ① マップ内に番号や絵を載せ、別枠で説明を入れる。

文字だけで魅力を紹介するのでは、イメージが湧かないと考え、神谷を代表する施設や文化財をマップ内に番号または絵にして載せた。また、別枠で説明を入れることにより、視覚的に分かるようにした。さらに、別面の掲載情報に載っているチューリップや神谷信用組合などの情報とも繋がっているため、情報掲載面の補助もできている。これにより、掲載情報もよりイメージしやすくなり、実際に確認して頂くことが可能となる。

#### ② 過去の写真を交えた説明を加える

旧神谷小学校のように、既に無くなってしまった場所もあるが、現存する箇所は、過去の写真と説明を載せ、現在との比較や歴史背景を知ることができるようにした。これにより古い神谷を知る人からは懐かしさを感じて頂き、良く知らない人からは、神谷についてより深く知ってもらうことができる。

#### ③ 方位や近隣の土地名・アクセス方法を記入する

マップ内に方位や近隣の土地名を入れることにより、地図としての利便性を高め、

少しでも神谷の方に使用して頂けるようにした。さらに神谷までのアクセス方法を記入することによって、外部の方々が神谷を訪問する際の手助けができるにした。こうすることにより、少しでも多くの方が、神谷を実際に訪れ、魅力を知って頂きたいと思う。

紹介した工夫には、先に述べた意見交換会の際に頂いたご意見も参考にしており、より神谷の方々に喜んで頂けるようなデザインとなっていると考える。

図表 3-11 神谷情報マップ

**【地図の番号説明】**

- ① 神谷公民館
- ② 神谷信用組合
- ③ 神谷運動地
- ④ みどりの公園  
日本で初めて植栽されたプラタナスがあります。また、丸根邸による天竺石を祀る地蔵でもありました。
- ⑤ 神谷中央公園  
元は神田田でした。2007年に建てた『園遊地蔵』の文字が刻まれた石壇と土蔵土家を見ていた地蔵であることが解り記されています。
- ⑥ 川治いの石壇  
今はおぼろげにみえている中で、当時より詳しい地名がみえている石壇の場所です。クレーン作機で掘り出されています。
- ⑦ 田植えと稲刈りの場所
- ⑧ さいのかみを行う場所
- ⑨ ジューリッップ具持の地

**⑩ <神谷公民館(旧東澤寺村役場)>**

現在の公民館が建てられている場所は、東澤寺の役所が二回目に移動した所です。昔はここで結婚式なども行われていましたが、現在は行事や会での集まりの場として、意見交換や交流を行っています。

**⑪ <神谷信用組合>**

歴史的価値の高い神谷信用組合。以前は組合、農協として使われていましたが、現在は昔の神谷の貴重な資料が保存されています。

**⑫ <神谷運動地(旧神谷小学校)>**

神谷小学校の全体的な場所であり、明治の頃は近隣の子どもたちがみんなここに遊んでいました。現在は広場となっています。

**【地図記号について】**

- <観音堂> この道は観音堂へ行く重要な道であり、昔は地蔵地でした。昔あちこちに散らばっていた地蔵をまつたものです。
- <地蔵種> 観音堂同様にご札地であったことが分かります。以前は地区内に複数あったのですが、今はこの一箇所のみです。
- <防火栓> 消防隊が消火活動に必要な水を供給する為の設備です。困らわしいですが、消火器ではありません。

**【神谷までのアクセス方法】**

電車：信越線本線 東澤寺駅下車から徒歩20分

バス：長岡駅大手口1番線乗り場 小千首車庫前行き浦バス停下車から徒歩20分  
長岡駅大手口3番線乗り場 神谷小学校前行き神谷バス停下車

**その他の情報:**

- 突切島**
- とどろきと** 神谷が管理する田んぼであり、地元の市やが協力して田植え・稲刈りを行っています。子供から大人まで多世代の方々の交流としても重要な場所です。
- 神谷と縁のある場所**
- くもみ七畝** 高橋九郎の別荘だった場所です。現在は紅葉の名所として、多くの観光客が訪れています。
- 井上円了先生の石壇** 浦出身の井上円了は東洋大学の創始者です。東洋大学の学生が彼の業績を称え石壇を建てました。



### 3. 3. 7 発行部数と配布先

「神谷情報マップ」は、神谷地区の方々に利用してもらうだけでなく、外部の方々にも利用してもらおうようにいくつかの施設に置かせて頂く予定である。そのため、神谷地区の185世帯への配布用に加え、市内の施設への配布や地域活性化プロジェクトの成果発表かでの資料での利用も考え、500部作成した。その内訳は、図表3-12のとおりである。

図表3-12を見てわかるように、長岡市内の多くの方が利用する施設に置かせて頂くことを考えている。この配布により、今まで神谷を知らなかった地域の人からも神谷を知って頂き、それをきっかけに多くの方に神谷の魅力を自分の目で確認して頂けるのではないかと思う。

図表3-12 「神谷情報マップ」の配布先と発行部数

配布先	配布数
神谷地区※	200部
越後みちのえき	50部
長岡市民センター	50部
まちなかキャンパス	30部
地域活性化P 成果発表	150部
来年度の資料用	20部
合計	500部

※神谷地区への配布数が200部だが、これは新しく入って来られる方などへの予備を含んでいるため200部となっている



回収率：14.5%

(2月20日時点での回収率 アンケート用紙25枚、QRコード回答2件)

### 調査結果

図表3-14より、「神谷情報マップ」をご覧になっている人が多く、私たちの活動の認知度が高いことが分かる。しかし、ご覧になっていない方もおり、「神谷情報マップ」の宣伝方法の工夫が足りなかったと思われる。

図表3-14 質問1. あなたは神谷マップをすでにご覧になりましたか？

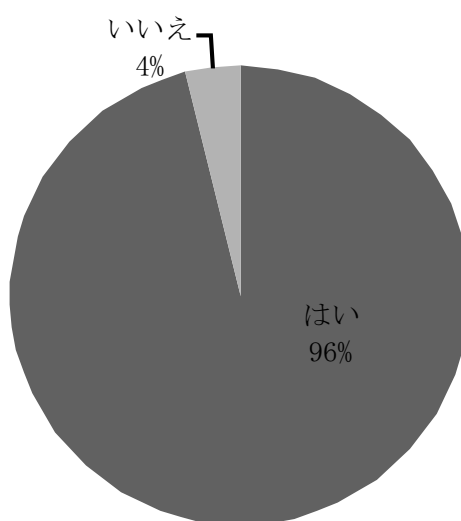
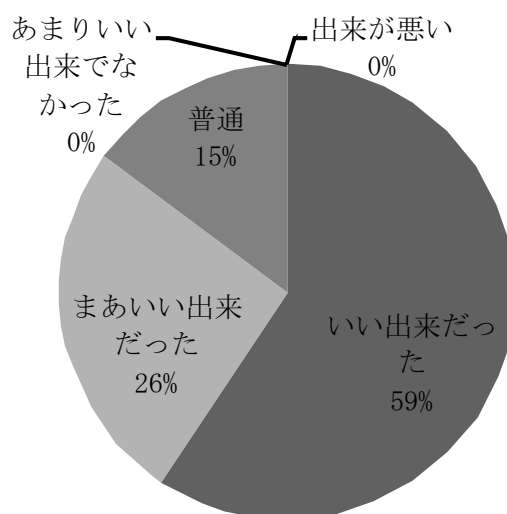


図3-15より、「いい出来だった、まあいい出来だった」を合わせ 85%の方から高い評価を頂いた事がわかる。

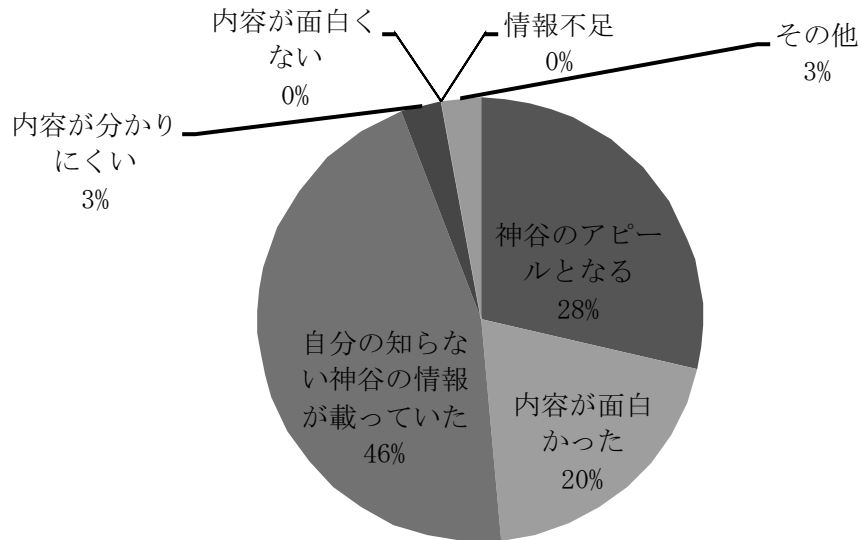
図表3-15 質問2. 神谷マップの出来はいかがでしたか？



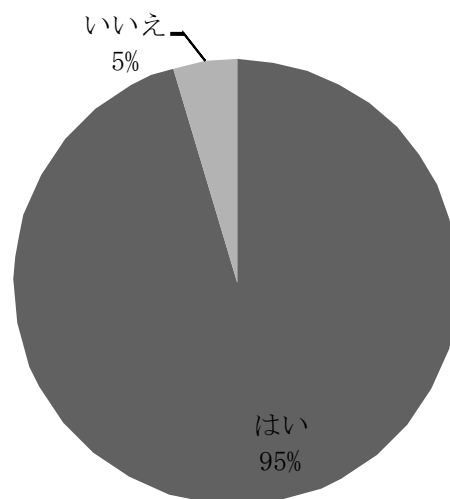
図表 3-16 と図表 3-17 より、自分の知らなかった神谷の情報を知った人や自分たちの地域の魅力を再発見した人が多くおられたことが分かる。

これまで見たこともない古い写真やチュールリップの歴史のことを、この「神谷情報マップ」を通して初めて知った人が多くおられたのではないだろうか。

図表 3-16 質問 3. なぜそのように思いましたか？



図表 3-17 質問 4. 神谷マップによって神谷地区の魅力を再発見しましたか？



意見や感想を記入していただく、質問 6 の自由記述欄では、「神谷の歴史を知ることができた」、「神谷の班の分かれ方を知ることができた」等の新たな発見ができたとの感想の他に、「神谷地区の班ごとの紹介をしてはどうか」、「昔の人々の生活習慣や神谷の産業を紹介

してほしい」等の意見が寄せられた。これらのご意見は、今後の活動の中に盛り込んでいきたいと考えている。

反省点としては、調査期間が短期間だったことや回収方法としてアンケート回収ボックスを公民館一ヶ所のみでの設置にしてしまったため、回収率が思ったように伸びなかったことがある。

今後は、神谷の方々が余裕をもって回答できるように回答期間を一ヶ月間程度設けたり、簡単に回答できるようにアンケートの投函場所を複数設けるなどの工夫をしてゆく必要がある。

## 4 歴史的建造物を活用した活性化

前年度に提案した「旧神谷信用組合の建物と休耕畑を連動させた活性化策」の具体化を目指した取り組みを行った。

### 4. 1 直売所

#### 4. 1. 1 商品の具体化

直売所で販売する商品として以前に提案された①畑で採れた野菜、②加工品、③工芸品の三つに対して具体的な検討を始めました。

①野菜は地元農家の希望者の物を販売すること。

②神谷のオリジナルの弁当、漬け物、佃煮、菓子などを売る

③神谷で作られた工芸品として藁で作られたストラップなどを売るなどが提案された。

#### 4. 1. 2 目玉商品の検討

直売所の商品として目玉商品はないものかと考えるなかで、地元の食材を使った郷土料理を開発できないかと検討を始めました。そのなかで神谷ではアスパラが有名なことが分かり、それを使った郷土料理はどうかと考えました。

### 4. 2 あぐりの里へのヒアリング調査

直売所の運営方法や販売商品などを検討するために、道の駅として活動している「あぐりの里」へのヒアリング調査を2011年7月26日に行った。

#### 1) あぐりの里の概要

あぐりの里は、新潟県長岡市川口中山にある道の駅である。設備は、休息設備、地域で採れた野菜を売る直販施設、売店施設で構成されている。従業員数は、13人（正社員が八人、パート・アルバイトが五人）＋社長。客層としては、旧長岡市の市民が多い。

図表4-1 あぐりの里店内



図表4-2 あぐりの里の商品



## 2) ヒアリング項目

ヒアリングした項目は、次の10項目である。

- ① 商品を取り扱う際に気を付けていること
- ② 商品の管理方法はどのようにしているか
- ③ 他の道の駅と比べ工夫しているところ
- ④ どのような商品がお客様に人気なのか（野菜、加工品、工芸品）
- ⑤ 野菜などの売れ残りの処理について
- ⑥ 生産者の利益、あぐりの里の利益について
- ⑦ 価格設定について
- ⑧ 直売所を運営する際に気を付けていること
- ⑨ 仕入れの量について
- ⑩ 季節ごとの商品は、その年毎に変わるのか

## 3) ヒアリングの回答

①の回答：地元で生産された物で揃えている。県内のもので揃えている。

②の回答：POSで管理し、生産者にメールで売れ行きを知らせている。商品のパッケージには、生産者の名前と電話番号を記してある。今日採れたものしか置いていない（ジャガイモ等の日保ちするものは違う）。

③の回答：親しみやすいように方言を使って話をしながら売る、や『お茶の間』という休憩スペースを作っている。話すことにより売り上げがアップする。試食がなくても、これはこうやって食べるとおいしいですよ、と話すと売れる。

④の回答：野菜（川口の野菜が一番。ナス、きゅうり、わらび、トマト）。加工品（ヒット商品が出ない。笹団子が売れる。工芸品（手芸品、バック、草履、帽子）。冬は干物、薬草茶（ドクダミなど）。商品作りは高齢化していつている。

⑤の回答：野菜、加工品については売れ残った場合、生産者に返品する方法を取っている。

⑥の回答：野菜、工芸品は17%、加工品は22%、集配（あぐりの里の方が生産者のところまで商品を取りに行く方法）は30%の利益があぐりの里に入る。

⑦の回答：安売りはしない。生産者・消費者・販売者で話し合いの場を設けている。野菜は最低価格が決まっており、POSからデータを取って価格を決めている。

⑧の回答：消費者も生産者も販売者もともに幸せになれる店作り。懇談会を開いている。あぐりを愛する会（年一）。生産者をモチーフにした劇などを行っている。

クレームがあった商品は出さないようにし、同じことが三回あったら出荷停止にする。

⑨の回答：納品管理はしていない。

⑩の回答：新しい商品が出ている。一年に新品は一つから二つ。毎年珍しい商品が出て驚かされる。新品種の商品は価格設定が難しい。通常の商品の値段＋ $\alpha$ 。多品目少量。目新しいものが売れる。

#### 4) まとめ

あぐりの里へのヒアリング調査の結果、直売所をやるにあたって大切なことが二つ判明した。

一つは、「他の直売所との差別化を図る」ということである。単に他の直売所を真似するのではなく、「ここに来ると面白い、また来ようと思ってもらえる、他の直売所と違う」といった、その直売所独自のものを考えないといけないことが分かった。あぐりの里では、毎月イベントを行うようになってから客の数が増え、売り上げも増えた。

二つ目は、ただ野菜を売るのではなく、野菜を買うついでに一般商品も買ってもらうための努力が必要であることが明らかになった。あぐりの里では、米菓会社と契約し、あぐりの里でしか手に入らないおせんべい類を販売している。

図表 4 - 3 ヒアリング風景



図表 4 - 4 販売商品の一部





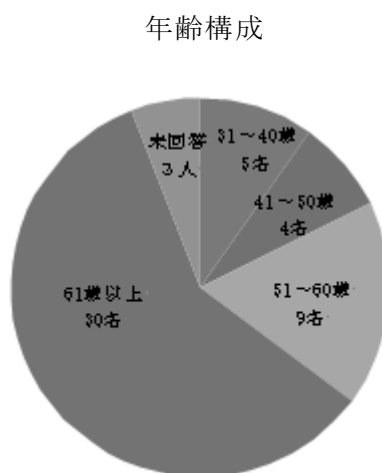
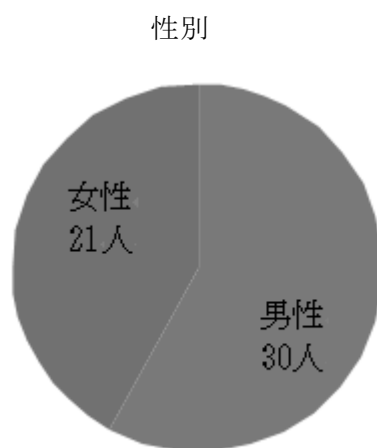
#### 4. 2 活性化案に対するアンケート調査

旧神谷信用組合の建物の活用方法として提案した「神谷地区の物産を売る直売所とそこに集った人々が気軽に交流を楽しめる設備と雰囲気を持った施設にし、地域コミュニティの活性化と同時に旧神谷信用組合という歴史的建造物の保存を行う」に対する神谷地区の人達の意向を知るために、神谷地区の人を対象としたアンケート調査を行った。

調査用紙は、神谷地区の全世帯165軒に配布した。回収した調査用紙は、51枚だった(回収率30%)。

以下がアンケートの内容と回答である。

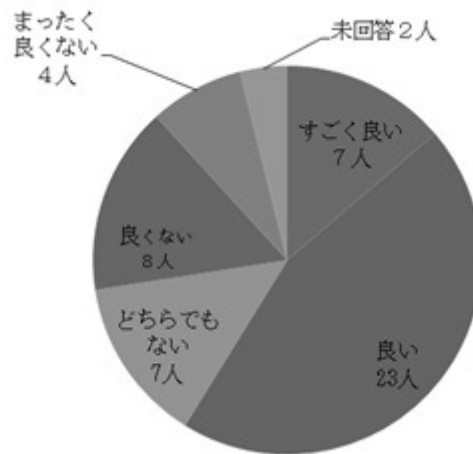
質問1. あなたの性別と年齢を教えてください。



51人中、男性30人女性21人という結果になった。年齢層は61歳以上の方が圧倒的に多かった。

質問2. 旧神谷信用組合の建物を直売所として利用することをどう思いますか？

1. すごく良い 2. 良い 3. どちらでもない 4. 良くない 5. まったく良くない



「すごく良い」と「良い」を合わせると約60%の人が、直売所として利用しても良いと考えていることが分かった。

「すごく良い」と「良い」と答えた理由は、以下のとおりである。

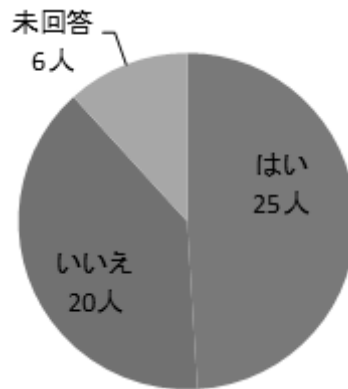
- ・近所に店がなくなり、もし車が運転できなくなったら近くに直売所があれば便利。
- ・中心に位置し、主要道路に面しているためいろんな形でPR可能であり、地域の活性化を図ることができる。
- ・せっかく手に入れた施設だから、大勢の人が利用出来ることに使用するのがよい。
- ・直売所にすることで、生産する意欲がわく。
- ・若い人との交流の場にも良いし、地方の野菜のうまさに目覚めていただきたい。
- ・神谷内にお店がなく、どこで買い物をして良いかわからない。若い人と一緒にないから大変。
- ・車の交通量が多く、他町村の方の目につきやすい。
- ・以前農協として利用していた時、めったに会わない人とばったり会い、話をしたりすることが出来て嬉しかった。

「良くない」と答えた理由は、次のとおりである。

- ・車で行くにも分かりづらく、停める場所が目に入らない。
- ・直売する人の年齢、人物が定まっていない。
- ・収容範囲が狭い。建物構造が狭く暗い。
- ・スーパーを利用している人が多いのでいけない。

質問3. JAの「ふれあいいち」等の直売所を利用したことはありますか？

1. はい 2. いいえ

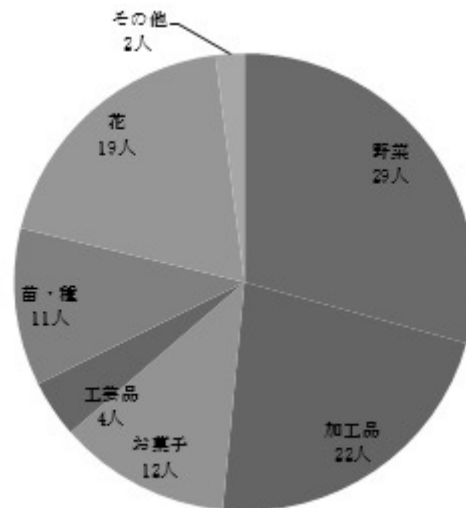


直売所を利用したことがある人が、ほぼ半数いた。

記入された選択理由を見ると、直売所を利用している人の多くは新鮮な野菜を目的としており、野菜を購入したという意見が一番多かった。直売所では新鮮な食材が手に入ることが利点であり、それを求める人が多くいることが分かった。その他の品目としては、花、果物、大豆、加工品があった

質問4. 直売所ではどんな物を販売して欲しいですか？

1. 野菜 2. 加工品 3. お菓子 4. 工芸品 5. 苗・種 6. 花 7. その他



もし直売所を運営することになったらどんな物を販売して欲しいかという質問には、野菜、加工品、花が多かった。これらは、他の直売所で購入したことのある物であり、需要の多い品物であることがわかる。

その他には、日用雑貨、来場者の意見を聞きみんなが求める物を置いて欲しいというのがあった。高齢化の影響か、遠くに買い物に行けない人が日用品を買うことのできる所を求める意見があった。

質問5. 直売所で売る郷土料理として、思いつく物があつたらご記入ください。

- ・にぎりめし ・煮菜 ・のっぺ ・テッカみそ ・つけもの ・ぜんまい煮 ・そば
- ・みょうがの酢漬け ・中央公園の銀杏

郷土料理として「のっぺ」という回答が多かった。神谷地区には、そばを作っている人がいるので、手作りのそばを販売してはどうかという意見もあった。直売所が多数存在する中で、直売所を開いて販売するからには、その地域にしかない商品が必要である。郷土料理や手作り品などは、人を呼び込む上で良いアピールになると考える。

その他には、「手作り食品は食品衛生法上の制約があるので、しっかりと考えなくてはならない」や「スーパーやコンビニで簡単な料理は間に合うし味も格段に良くなってきているので、食品の販売は検討が必要」という意見があった。

質問6. 直売所で売る工芸品として思いつくものがあつたらご記入ください。

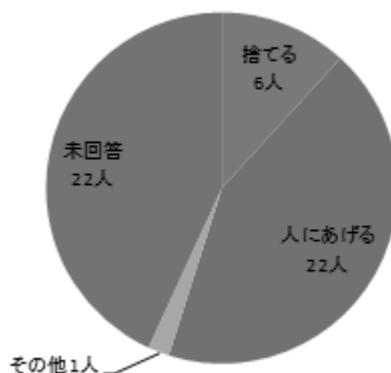
- ・ホテルのポスター、ペンダント ・メ縄、わらの加工品 ・ホウキ ・竹細工
- ・古布を使ったパッチワークの座布団、クッションカバー

メ縄という意見が多かった。わらの加工品を作っているシルバークループが神谷地区にはある。そのグループの協力を得ながら、工芸品を販売するのが良いと考える。

神谷地区には、様々な郷土料理や工芸品がある。神谷地区を訪れた他の地域の人が、とても興味を持てる素敵な地域である。

質問7. ご自宅で作った野菜が余った場合、どのように処理されていますか？

1. 捨てる
2. 人にあげる
3. その他



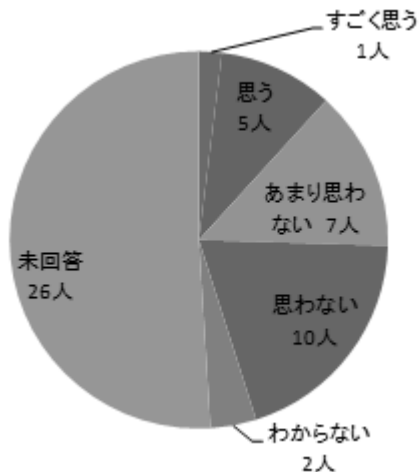
余った野菜は人にあげるという回答が、43%あった。捨てるという意見も少数ながらあり、せっかく作った野菜を無駄にしている。

直売所で販売するとなれば耕作する意欲も湧き、高齢者の日々の励みになるのではないかと考える。また、販売にいらなくても、郷土料理の材料にするなど、用途はいくらでもある。近所や親戚にあげることで、地域内のコミュニケーションが活発になり、豊かな安全で安心な暮らしを実現できるのではないだろうか。耕作は人と人を繋げる大切なコミ

ユニケーション方法である。

質問 8. 直売所があれば、野菜を販売したいと思いますか？

1. すごく思う 2. 思う 3. あまり思わない 4. 思わない 5. わからない

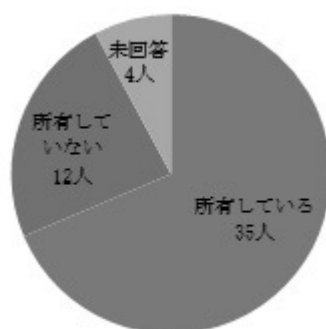


直売所での野菜販売に関しては、あまり思わない、思わないという意見が約3割あった。自宅で耕作している人たちは、自分たちで消費するために耕作しているのであり、販売するなど他の用途は考えていないのだろう。

しかし、中には、自宅で耕作している野菜は形が悪かったりしているが、あまり良い品でなくても良いのであれば販売したいという意見もあった。また、少なからず、販売したいという意見や、目標があればお年寄りの耕作意欲が湧くという、前向きな意見もあった。

質問 9. 畑を所有していますか？

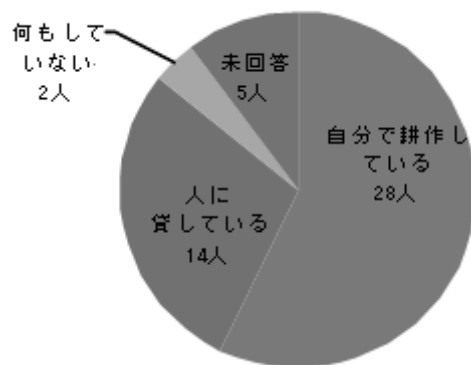
1. 所有している 2. 所有していない



畑を所有しているとの回答が約70%あり、神谷地区では、畑を所有している方が多くいることがわかった。今回のアンケートの回収率はそれほど良くなかったが、全世帯の回答が出たとした場合、神谷に住むほとんどの世帯が畑を所有していると考えられる。

質問10. 畑を所有している方にお聞きします。

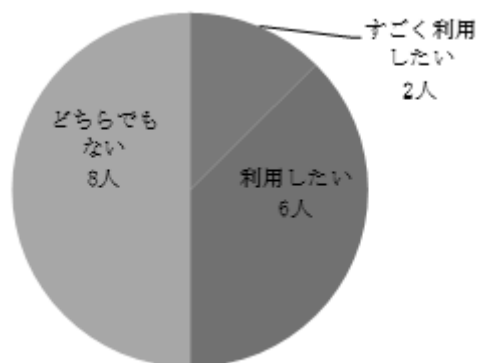
1. 自分で耕作している 2. 人に貸している 3. 何もしていない



畑を所有している方の多くは、自分で耕作していることが分かった。人に貸している方も約30%いた(複数回答有)。

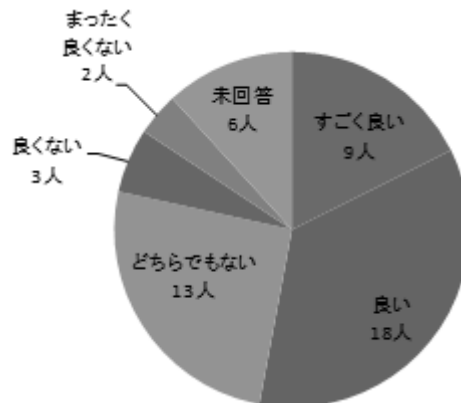
何もしていないと答えた人は2名であったが、神谷を訪問した際に休耕畑を多く見かけたことから、何もしていない方は、アンケートの結果以上に多くいるのではないかと考えらる。

質問11. 上の質問で2, 3と答えた方にお聞きします。もし、畑を貸し出すシステムがあったら利用したいと思いますか？



畑の貸し出しシステムの利用を希望する人は、約16%しかいなかった。「どちらでもない」と答えた数が多かったのは、貸し出すシステムが決まっていない現状では貸し出しを考えるのは難しいからかも知れない。貸し出しシステムのプランが明確になれば利用したい人が増えるのではないだろうか。

質問 1 2. 旧神谷信用組合の建物を休憩所兼交流の場として利用することをどう思いますか？ 差し支えなければその理由や利用の仕方など教えてください。



交流の場として利用することに「良い」と答えた人が半数以上いた。地域内外の人と交流したい人が多く、活性化に繋がるという意見も多かった。みんなが一つの所に集まり情報交換できれば、より安心して暮らせるのではないだろうか。また、楽しみも増え、より充実した日々を過ごすことができると考える。だが、意見にもあるように、この案を実行するには、管理費など問題が出てくる。この経費は直売所の売り上げからと考えていたが、しっかりと損益計算する必要があるが、この度の取り組みの中では明確にできなかった。

回答の際に記入してもらった理由をまとめると、以下の通りであった。

### 「良い」

- ・気兼ねなく集まれる所があれば仲間作りができ良い。
- ・老人が多くなるので憩いの場として、又は趣味を生かして年寄りの手作りの物をみんなでお茶あつていくことも良い。
- ・中心の場所であり交流拠点施設として活用し引き籠りを無くすようになれば良い。
- ・歴史文化の会以外に活用されていないから良い。
- ・宿泊できる施設、区民の娯楽ができると良い。
- ・交流の場として良い。みんなでお茶を飲みたい。
- ・趣味の共有や情報交換ができる。
- ・有効利用することは地域活性化に繋がる。
- ・買い物をしながら、そこに行けば誰かと話ができる場所があるのは嬉しい。
- ・現在の活用が不十分で宝の持ち腐れ。

### 「どちらでもない」「良くない」

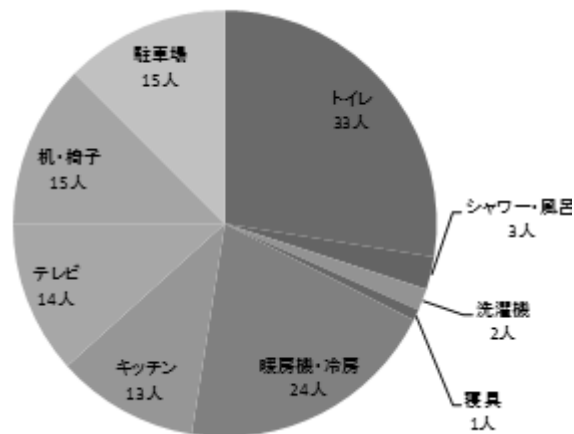
- ・活用するのは良いと思うが、管理費等こまかい問題が出てくると思う。住民がみんな使用するわけではないので、しっかり考えてもらいたい。
- ・他に集会所があるので必要ない。管理費もかかるし、町内会費が上がるのも厳しい。
- ・集落センターがあるので直売所だけで良いと思う。

## 他の活用方法

- ・リハビリテーションのような軽い運動の場
- ・児童館
- ・歩行可能施設
- ・テレビ体操などお互いで行える運動
- ・居酒屋風にしてはどうか？
- ・コーヒーやお茶が 50 円程度で飲めたら良い

質問 13. 旧神谷信用組合の建物を休憩所兼交流の場として利用する時、どのような設備があれば良いと思いますか？

1. トイレ
2. シャワー・風呂
3. 洗濯機
4. 寝具
5. 暖房機・冷房機
6. キッチン
7. テレビ
8. 机・椅子
9. 駐車場
10. その他



建物の中で過ごす為の最低限必要な設備に多くの回答が寄せられた。休憩所にするには、子供用の絵本や子供が安全に遊べる環境もあったら良いのではないかと、という意見もあった。



質問 1 4. 直売所以外に利用方法やその他の意見、提案がありましたらご記入ください。

### 「提案」

- ・高橋家を中心とした神谷の成り立ちの歴史記録館として利用したらどうか。
- ・サークルやイベントの発表の場。
- ・コーヒーやお茶(有料)が飲め、夏にはアイスクリーム(自家製)等を販売する。
- ・資料館として活用。
- ・持ち込み居酒屋、越路地域の観光地案内所。
- ・持ち寄りの本を並べて貸し借りできる場所 (見たい本をなかなか買いに行けないので)。
- ・有料での各種教室の開催。
- ・子供に読み聞かせ、絵本図書館。
- ・コンビニや小さいお子様の広場、老人会とは違った集まり。(老人会が口を出さない気楽な所)
- ・村の写真を飾る。

### 「意見」

- ・有効活用するのは良いことだと思うが、管理費、維持費の問題があり簡単にできることではない。利用しない住民への負担にならないように検討が必要だと思う。
- ・神谷には集会所があるのでそちらでこのような利用はできないのか? 同じような施設は二つもいない。管理費等が住民の負担になるので集会所をもっと活用すればいい。
- ・古き良き建物であるが、規模が小さく、暗く、特定な人のみ利用する危険性があり、地域コミュニティ活性化への目的には程遠い感じがする。
- ・明るい地域コミュニティ活性化には誰しも必要な何かが中心になればならないと思うがどうだろうか。神谷は時代の進化により平穏な集落になった。それも良いが、少子高齢化進む中で旧神谷信用組合の建物に神谷郵便局、そして旧神谷小学グラウンドにコンビニエンスストアを計画されんことを望みます。
- ・住民全員でじっくりとゆっくり考えませんか? 今回ひとつの提案を頂きましたので、今後どのようなニーズがあるか時間をかけて検討してください。問題点として以下のことをどう解決するか自分達自身で考えているところです。
  1. 買い物難民になった場合
  2. 通院(病院など)の手段
  3. ボランティア組織の結成(できる人が出来る範囲でしたい)

## 4. 3 アンケート結果のまとめ

神谷地区には畑を所有している世帯が多く存在し、耕作が盛んな地域であるということが明らかになった。また、アンケートに解答して頂いた方 51 人中 30 人(59%)が 61 歳以上であり、高齢化が進んでいることが分かった。回答には 30 歳以下の方がいないが、これは、老人が一手に引き受けて畑仕事をしているためと考える。

今回のアンケート調査で、旧神谷信用組合の建物を直売所・休憩交流所にすることについて、全体的に「良い」という意見を頂いた。その理由としては、「地域の人が多く集まりお茶などを飲みながらコミュニケーションを取りたい。」、「近くに買い物する場所がなく、歳をとったら便利」という意見が多かった。逆に「良くない」という意見も多数頂いたが、費用に関する指摘が多かった。直売所にするまでの費用、直売所にしてからの維持、管理費はどうするのかなど、費用に関する案を明確にしていなかったことが理由として考えられる。案を明確にしていれば、良いと思ってくれる人も増えたのではないだろうか。

## 5 まとめ

### 5.1 マップ作りに関して

#### 5.1.1 まとめ

##### I 結果

今回は地域の魅力を再認識して頂き、住人同士の結びつきを強くしようと言う目的でマップ製作を行った。特に、若者層と呼ばれる、仕事や学校の都合により地域の集まりにあまり参加できない層の引き込みを中心に、働きかけようとした。その結果を確認するためのアンケートは、想像していた回収率より下回る結果となってしまった。興味を惹くところまではできたが、地域の活動参加まで踏み込むには地図では弱いのではないかと感じる。

また、今回は神谷の地域資産や歴史などの紹介を目的としたため、情報を中心として発信したのだが、紹介に留めるだけでなく、実際の場所におけるなにかしらのアクションを起こさないと活かされないのではないだろうか。マップを配布し、「実際の場所はあるような場所か」と、それだけで終わってしまうのはもったいないことである。魅力あるたくさんの歴史や地域資産、地域風土、や活発な取り組みをもっと活かすような取り組み方法があることに気付かされた。

##### II 提案

今回行った活動による結果より、私たちは以下のように提案する。

調査の中で、数々の歴史資産が当時のまま残されており、なおかつ建設された当時の思想が地域文化の中に溶け込んでいる場所だということが分かった。今回はコミュニティ活性化と言う面からの行動であったが、これだけ他の場所にはないものを持っている神谷地区は、外部発信による活性化やアピールにつながることを目的とした活動を行ってもよいのではないかと考える。

その具体的な提案として、1つ目にチューリップ発祥の地であることから、チューリップを国道沿いに植え、神谷が新潟のチューリップの発祥の地であることをアピールし、同時に神谷地区の観光の新たな目玉とするような取り組みを行う。

2つ目には高橋ゼミナール4年生が行っている旧神谷信用組合の建物を活用した活性化方法の推進、あるいは地域の方が考えている文化遺産の看板立てを挙げる。また、今回の神谷マップで載せきれなかった情報をまとめ、神谷の歴史書として編纂し、さらに、地区に残されている書物や写真の整理を行い、歴史館などとして利用することも可能ではないかと考える。

まだまだ様々な活性化案が考えられるが、それらのメリット、デメリットを踏まえながら取捨選択することによって、神谷地区のあり方も変わってくるだろうと考えられる。私たちもその手助けとなるように、今後も活動していく予定である。

#### 5.1.2 反省点と改善点

##### I 反省

活動がスムーズにいかなかった要因として、以下の点が挙げられる。

- ①私たちが神谷に訪問した際、特定の人との交流ができなかった。

②自分たちが調査で得た情報を、うまく報告会などで伝えきれなかった。

③神谷の行事への個々の参加率は高かったが、ゼミナールメンバー全員での神谷行事への参加が出来なかった。

④図の目的や活動目的が、ゼミナール開始時からしっかりと定まっていなかった。

以上4点が挙げられる。

①は、初期より情報共有場所を作成しなかったこと、その手段を確立させなかったことにより情報共有が困難で、ゼミナール活動内での報告で時間を取られてしまったことが、作業が遅れる要因の1つとなってしまったと考える。

②は、プレゼンテーション能力・まとめる力の低さが影響しているのではないかと考える。発表の場だけでなく、常時の意見交換でも相手に伝えることが苦手だと言うことが強く関係しているのだと思う。報告書の内容も、そこで行われたことだけを報告しており、具体的内容はあまり書かれていないが多かった。何故それを行ったのか、何を知るためにそれを行ったのか、という点を行動した個々人が理解していなかったためではないかと考える。

③は、「神谷の行事等の参加や不参加により、情報の偏りが出てきた」とほとんどのメンバーが口を揃えて述べた意見である。また、用意された場では、協力して頂ける方が決まっていたために、若い人の意見があまり聞けなかったように思う。そのため、比較的若い方寄りの意見と我々の考えとの間に相違があると、意見交換会で改めて実感した。

④は、意識や考え方の違いが起こり、進む方向性の統一が困難となった。実際に自分の耳で聞いた内容と、誰かの口から伝えられた内容では、話し手により情報を取捨選択されてしまうため、情報の統一がとれていないこともある。それにより、どこに向かって作業をしているのか、何が目標なのか、何のために行っているのか、という部分でよく迷走が起きてしまった。

## II 課題

課題点をまとめると、次の2点である。

1つ目に、メンバー間の意見統一が常に難航し、結果としてゼミナール活動全体の行動が遅れた。

2つ目に、神谷において一部の方々とはコミュニケーションが取れなかった。

ゼミナール活動内の意見統一に関しては先に述べた通り、ゼミナール生一同の親睦を深め、円滑な議論を実現し、神谷調査報告書等の活用の推進を図り、また、その報告方法や報告書の書き方、視点の置き方をしっかりと各自意識して書くことが重要となってくる。ゼミナール活動内の意思統一は、メモを取り、各自がその目的となる部分を把握して、次回も食い違いのない議論を行うことが重要だと考える。その際、自分の意見と他人の意見を分けて考え、自分の言葉で自分の意見を発信することが重要である。

また、神谷でコミュニケーションをとる年齢層の偏りに関しては、参加の仕方や各自の積極性が特に関係してくる部分大きいと考える。我々のコミュニケーション力不足もあるが、たくさんの方と交流ができる行事の場では、相手の方が働きかけてくれるのを待つのではなく、自分たちから積極的に働きかけ、機会を無駄にしないようにすることが重要である。今回のことと言えば、行事によく参加する年代の方々とはそうでない年代の方々(例

えば、比較的若い年代の方々には仕事が忙しく行事に出られない)と、働きかけるターゲットが異なっていた。そういった方々とも積極的に会話するためにも、今までのように行事に参加するだけでなく、そこから得られるものは何か、と言う点を念頭に置きながら動くことが必要である。

### 5. 1. 3 社会人基礎力の変化

ゼミの各メンバーに本年度の活動を通して、身についた、逆に足りないと感じた社会人基礎力は何か、と問いかけたところ、多くのメンバーが“コミュニケーション力”、“課題発見力”と“計画力”、“協調性”であると答えた。

世代を超えた交流を行い、積極的に参加・行動していたためかコミュニケーション能力は向上したと感じている者が多くいた。また、活動始めの頃から何を行うべきか、何が必要か、どのような事前準備が必要かを考えてきていたため、課題発見力が伸びたのではないかと考える。

また、個性的な性格や考え方を持つものが多く集まっていたため、意思疎通がうまく行かないや、意見の食い違いが起こり、スムーズに行動できなかつたと反省している。計画を立ててもその通りに進んだことはなく、絶えず変更修正を行うことが多かつた。

今年度の活動では、ゼミナール活動への意欲的な参加や積極的な行動する機会が多かつた。その姿勢に切り替えられたのは、地元の方と腰をすえて交流することで、ビジョンを明確に描けたことがあつたのではないかと考える。目的意識の共有、交流による動機付けが成功したことによって、参加率はぐんと伸び上がった。

しかし、人数が多かつたこと、中心となつて動くのが特定の者であつたことに対し、自分がやらなくても誰かが行っている、と言う他人任せの意識が無意識にあつたのではないかと予想できる。そうでなければ、役割分担や仕事の割り振り、動く者・知らぬ者の差が出るなんてことは起こらなかつたのではないかと考える。

意欲的な参加が達成できたのであれば、次は積極的な参加と言う段階を達成するための課題が見えてくる。いかにそれを相手に働きかけるか、と言う点を今後は考える。

## 5. 2 歴史的建造物を活用した活性化のまとめ

本活動では、旧神谷信用組合の建物を利用した地域活性化の方策を2年間にわたつて研究し、活性化策をまとめ、提案した。

昨年度(三年次)は、神谷地区のヒアリング調査等を行い、神谷の現状を把握した。ヒアリングの結果、耕作者の高齢化により、畑作を辞めたいと思っている人が多い、建物が交通の便が良いところに位置している、旧神谷信用組合の建物と畑の距離は100mと近く、建物を活用するのに適している等が判明した。

そこで、建物を利用するにあたり、神谷地区で使われなくなつた畑と連動して使う方策を考えた。具体的には、使われなくなつた畑を神谷地区以外の人達に貸し出し、建物は畑貸し出しの拠点として利用する方法である。建物内には、畑貸し出しの仲介組織の窓口、耕作者の休憩所、地元の野菜等を売る直売所の三つの施設の設置を提案した。

この提案の狙いは、直売所や畑を貸し出すことにより地域外の人達の神谷地区への訪問を促し、地域活性化を図ることにある。

今年度（四年次）は、畑貸し出しの方法を考えていては時間が足りないのでは、と三年次の成果発表会で指摘されたため、直売所のみを焦点を当てて考えることにした。

直売所の提案をするにあたり、ヒアリング調査とアンケート調査を行った。

ヒアリング調査は、多くの客さんが訪れ、いつも活気にあふれている道の駅『あぐりの里』（新潟県長岡市川口中山）に対して行い、直売所の運営に必要な事柄について聞いた。このヒアリング調査からは、他の直売所と差別化を図らないといけない、ただ野菜だけを売るのではなく利益に繋がる一般商品を売らないといけない、という二点が明らかになった。

アンケート調査は、神谷地区の165世帯にアンケート用紙を配り実施した。得られた回答では、費用についての指摘が多かった。直売所にするまでの費用、維持費、管理費等の調達方法を明確にしていなかったために、このような意見が出たのだと考える。

調査した結果、直売所として利用するにあたり必要なことは、①費用・コストの見積もり、確保方法 ②商品の確保（生産者の契約、取扱商品について） ③従業員の確保 ④他の直売所との差別化、の四点である。

この四点については、具体的に検討していく必要がある。

## 《参考文献》

- 『越路町史 資料編3 近代・現代』 越路町 平成11年3月31日発行  
『越路町史 通史編 下巻』 越路町 平成13年11月30日発行  
『創業百年史』 株式会社 北越銀行 昭和55年9月10日発行  
『決定版 長岡ふるさと大百科』 郷土出版  
『越路町制50周年記念誌』 29項より (2005年3月20日発行)  
『越路町史 近世・近代編』  
白井又三朗 高橋九郎  
(<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/monjo/kyoudo-hito/jin2007.pdf#seach>)  
『チュウリップの葉』 新潟県農産物検査所 刊行年不明  
『チューリップ栽培誌ノート』 木村敬助 1997  
『チューリップ・鬱金香一歩みと育てた人たち』 木村敬助 2002  
『小山重小伝 我が国チューリップ栽培の先覚者』 木村敬助 2008  
JA全農にいがた (<http://www.nt.zennoh.or.jp/>)  
にいがた観光ナビ (<http://www.niigata-kankou.or.jp/>)  
内藤孝：高橋九郎、郷土長岡を創った人々、長岡市、2009.3  
高齢者の購買行動と地域商業の課題  
([http://opac.kanto-gakuin.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr\\_bookview.cgi/U\\_CHARSET.utf-8/N120000471/Body/link/06fukuda.pdf](http://opac.kanto-gakuin.ac.jp/cgi-bin/retrieve/sr_bookview.cgi/U_CHARSET.utf-8/N120000471/Body/link/06fukuda.pdf))、2009.4

## 謝

## 辞

「神谷情報マップ」作りの活動を進めるにあたり、神谷区長をはじめ多くの方々にお世話になりました。

思い起こせば、昨年春から、神谷地区の行事に参加させて頂き、活動の資料とさせて頂くと同時に、多くの経験をさせて頂きました。特に、ゼミナール生主催のバーベキューでは、右も左もわからない私たちと一緒に輪の中に入って下さり、盛り上げて頂きました。

また、9月に行った新興住宅に住む方を対象としたヒアリング調査では、大変お忙しい中、堀沢様、小川様に、10月に行ったチューリップに関するヒアリング調査では、水島敏様にそれぞれお話を伺わせて頂きました。どちらも大変興味深いお話をさせて頂き、その後の活動に生かすことができましたことを感謝申し上げます。

上記の方々をはじめ、すべての活動の際にお世話になった神谷区長の白井清様、そしてアンケートに協力して下さったすべての神谷に住む方々に御礼を申しあげます。本当にありがとうございました。

マップの内容と構成の検討に際して貴重なご意見をいただいた「歴史・文化の会」の皆様、おかげさまで立派なマップを作ることができました。印刷の際には、北越印刷の羽田征司様、長岡大学・地域研究センターの山田様、蕪澤様には入稿が遅れるなど大変ご迷惑をお掛けしてしまいました。この場を借りまして御礼を申し上げるとともに、お詫び申し上げます。

旧神谷信用組合の建物を利用した活性化の取り組みでは、忙しいにもかかわらず快くヒアリングを受けて下さった道の駅「あぐりの里」に感謝いたします。

また、中間発表会、成果発表会の際には、桑原真二様から貴重なアドバイスをいただき、誠にありがとうございました。

たくさんの方に出会い、ご迷惑をおかけしながらも無事にこの1年間活動を続けることができました。この活動を通じて成長した私たちの姿をいつの日か、今回関わった方々にお見せするとき、それが初めて恩返しとなると考えております。

これからもまた一段と学生生活等に精進して行く覚悟でおりますので、ご指導ご鞭撻のほどお願いいたします。